群教セ	G01 － 03
	平16.218集

説得力のある表現ができる子供を育てる国語科指導の工夫

── センテンス・カードを活用した文章作りを通して ──

長期研修員　　新井　俊一

《研究の概要》

本研究は、表現力を高める指導において、センテンス・カードを活用することによって、説得力のある表現ができる子供が育つように指導の工夫を行ったものである。具体的には、相手や目的を設定し、文をつなげる条件を限定して説得力が増すようにセンテンス・カードを並べ換えたり修正したりしながら文章にしていった。次に、説得力のある文章を今後書くときにいかせるように、表現に関する自分自身の目当てを作る活動を行った。

【キーワード：国語－中　作文指導　表現力　センテンス・カード】

Ⅰ　主題設定の理由

人々の考え方や価値観が今まで以上に多様化していくこれからの社会では、子供たちのコミュニケーション能力の育成は極めて重要である。国語科教育においても、適切に表現する能力と正確に理解する能力とを基盤とした伝え合う力の向上が強く求められている。特に論理的に意見を述べたり相手や目的に応じて適切に書いたりする表現能力の育成が必要となってくる。

一方、本校の子供たちを見ると、こうした表現能力が十分身に付いているとは言えない。中でも、文字言語による表現を苦手とした子供が多い。その原因の一つは、親しい友達など特定の人間関係内で通じる表現活動はよく行っているものの、それ以外の相手に文章を書く経験が少ないことにあると考えられる。そのため、相手に納得してもらえるように自分の考えや意見を文章にすることが不得意である。子供たち自身もこうした文章を書くことに対して苦手意識をもっており、全体の約30パーセントにも上ることがアンケート調査によって分かった。

また、これまでの作文指導について振り返ると、子供たちの書く力を養う指導を十分行ってきたとは言えないことも原因の一つと考えられる。報告文や意見文を書く場合、集めた材料から構想メモを作り、それを基に原稿用紙に書くようにしていた。すると、構想メモによって構成や内容をはっきりさせたにもかかわらず、それに基づいて文章にすることが思うようにできない子供がいる。構想メモを作る時点では、文と文をつないで文章にすることまでは考えていないので、メモに書いた言葉や文をそのまま使って文章にしようとしたときにうまくつながっていかないためである。説得力のある文章として、筋道が通るように文を幾つもつなげていくためには、構想メモと文章作りを行う活動の間に、相手に納得してもらえるように考えて文をつなげる学習活動を設定する必要がある。

そこで本研究では、センテンス・カードを活用して文章を作る活動を行おうと考えた。センテンス・カードとは、事実や意見などを一文で書き込んだカードのことである。このカードに書かれた文をつないで文章を作る。一文を一つのカードに記入するため、長い文章を書くことに負担を感じていた子供でも、書きやすくなるはずである。また、相手に納得してもらえるよう表現を工夫して書き直すとき、文を並べ換えたり加除修正したりすることも容易にできる。センテンス・カードを使って文をつなげる活動を行うことで、これまで身近な相手にしか文章を書いたことのない子供たちも、説得力のある文章を書くことができるようになると考える。

しかし、一度だけ書けたとしても、説得力のある表現力が身に付いたとは言えない。自分がどのように表現を工夫したのか分かっていなければ、今後も説得力のある文章が書けるとは限らないのである。よって、自分がどのような工夫をしたのかを振り返り、説得力のある文章を書くための目当てを作る活動を次に行う。子供たちは目当てを作ることによって、表現力を高める方法が具体的に分かるようになり、相手に納得してもらえるようにするための視点をもって文章を書くことができ、説得力のある表現力を身に付けることができるものと考える。

以上のことから、表現力を高める指導において、センテンス・カードを活用した文章作りを行うことによって、説得力のある表現ができる子供を育てられると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

表現力を高める指導において、自分の考えや意見を文章にするために、センテンス・カードを活用することによって、説得力のある表現ができる子供を育てられることを、実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　つかむ場において、相手や目的などを設定して、センテンス・カードを使って文のつなげ方を考えることによって、表現を工夫して文をつなげられようになり、相手や目的を意識した説得力のある文章を書くことができるであろう。

2　まとめの場において、センテンス・カードを使って作った文章から表現の工夫を見付け出し、文章表現を行うときの目当てを作ることによって、相手や目的を意識した表現の高め方が具体的に分かるようになり、説得力のある表現ができる力を身に付けられるであろう。

Ⅳ　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1)　説得力のある表現とは

説得力のある表現とは、読み手が書き手の考えや意見を明確に理解し、妥当なこととして受け入れられる文章表現のことである。読み手に受け入れられるためには、自分の考えや意見をはっきりとさせ、根拠となる客観的な事実をもとに、筋道の通った論を展開できるようにする必要がある。ただし、論理的な文章にしようとしても、相手や場面を全く意識しないで書いた文章は、独りよがりなものとなってしまう危険がある。相手に妥当なこととして納得してもらえるように表現を工夫しながら、筋道の通った文章にすることが大切である。そこで本研究において、説得力のある表現とは、以下の条件を満たすものと考える。

○相手にとって分かりやすい表現や納得できる論の展開である。
　・相手に分かりやすい、言葉遣いや文の長さとなっている。
　・文と文、段落と段落の関係が明確である。
　・根拠となる事柄と自分の意見や主張がはっきりと区別でき、筋道の通った論となっている。
○相手や目的を意識し、自分の意見や主張が受け入れてもらえるように工夫した表現となっている。
　・文章の目的をはっきりさせ、それに応じて表現を工夫している。
　・相手が文章の内容に関してどの程度の情報をもっているか、読んでどう反応するかといったことを想定したうえで、文と文のつなげ方を考え、言葉を選んで表現を工夫している。

(2)　センテンス・カードを活用した文章作りについて

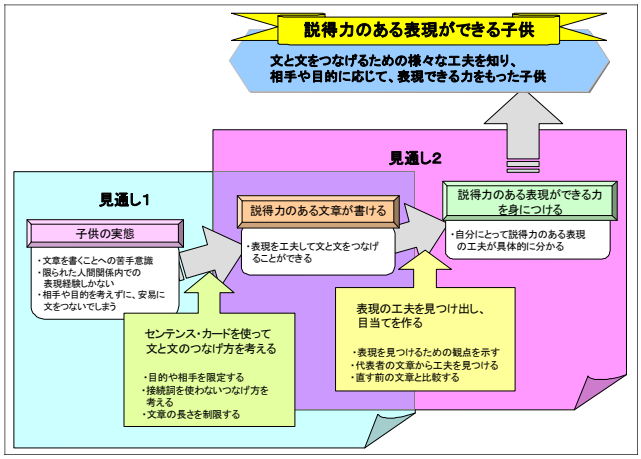
文と文をつなげる工夫をより効果的に行うためには、文を自由に並べ換えたり、書き直した

りすることが簡単にできるカードを使うことが有効であると考える。このカードは、メモのように一時的な記録として単語等を書いたものではなく、一つの文が書かれたもの（以下センテンス・カード）とする。センテンス・カードに書くものを単語ではなく一文としたのは、文にしてあればそれを並べ換えながら文章にしていくことができると考えたからである。本研究は、説得力のある表現ができる子供を育成するために、このセンテンス・カードを活用した文章作りを通して、文章を書く場合の自分にとっての視点を作成していくものである。

①　つかむ場

相手や目的を設定した課題について、説得力のある文章になるように表現を工夫しながら、センテンス・カードに書いた文同士をつないでいく活動を行う。手紙を書く場合に相手として想定しない人物に対して、ある目的をもって書く課題を設定することで、子供たちは自然に相手や目的を意識して表現を工夫するようになると考える。

まず、各自が課題に沿って文を作り、一文ずつ付箋（せん）に書き込んでセンテンス・カードにする。このとき、自分の考えや意見とその根拠となる事実や理由とで付箋の色を使い分ける。色を使い分けることによって、子供たちは主張とその根拠がはっきりと分かる構成を意識することができる。次に、作ったセンテンス・カードを全体の構成を考えて、並べ換える。カードの順序が決まったら、相手に納得してもらえるように文のつなげ方を考え、必要に応じて言葉や文を加除修正したり交換したりする。このときなるべく接続詞を使わず、長い文は二つ以上に分けるという条件を設定する。これまで子供たちは、文と文をつなげるときに、文中の表現を適切に直していくような学習が不十分であったため、表現を変えながらうまくつなげることができない。文をつなげようとすると、内容について考えることをほとんどせず、接続詞を安易に使ってしまったり、長い文としてつなげてしまったりする傾向がある。そこでこの条件を設定することによって、相手や目的を意識してつなげ方を考え、言葉を選び表現を工夫していくようになり、説得力のある文章を書くことができるものと考える。



研究構想図

②　まとめる場

①で表現を工夫しながら文をつないだ自分の文章から、各自が目当てを作る活動を行う。まず、自分がどんな表現の工夫をしたか見付けやすいように、見本となる文章から工夫点を探し、整理する活動を行う。表現の工夫点がはっきりと分かる文章を、子供の書いたものの中から班ごとに一つあらかじめ選んでおき、それを読み合ってどのような表現の工夫をしているのかを見付ける。このとき、手を加える前の文章のコピーを用意し、直した後の文章と比較できるようにしておく。また、整理する観点を言葉遣いや文末表現など表現自体の工夫と相手や目的を意識したものとに大きく分けて示す（表）。これによって、自分が直した文章について言葉遣いだけでなく、工夫した表現についても見付けられる視点をもたせることができると考える。その後、観点に基づいて班ごとに発表し、相手を説得するための表現方法を確認して更に

表　整理する観点

表現自体の工夫	相手や目的を意識した工夫
・相手や目的を考えた言葉遣いにしている ・長い文は二つの文にしている ・余分な接続詞を使わないようにしている ・重なった表現の所は削除している	・より説得力が増すように主張の文を置く位置や数を工夫している ・相手に納得してもらえるように文の順序を変えている ・相手の考えや気持ちを意識して表現を変えている ・相手の考えや気持ちを意識して課題に書いてないことも書き加えている

理解を深められるようにする。

最後に、自分の文章について同じ観点で振り返って、工夫した点や表現の特徴を見付け、それを基に説得力のある文章を書くための目当てを各自で作る。一人一人が表現力向上のための目当てを作ることによって、それぞれの子供にとっての具体的な方法が明らかとなり、説得力のある文章を書く力を身に付けていけるものと考える。

2　研究の方法

説得力のある表現ができる子供の育成を目指す本研究について、研究の見通しに基づき、次のような実践によって検証する。

(1)　研究実践の計画と抽出児

対　象	伊勢崎市立第二中学校２年３組 38人			抽出児Ａ（女）	自分の感じたことを文章にすることは好きであるが、自分の考えを筋道立てて書く経験は少ない。説得力のある文章にするために、相手の立場や考えを予想した表現の工夫ができるようにしたい。
授業者	長期研修員　新井　俊一				
期　間	10月27日～11月４日	時間	４時間	抽出児Ｂ（男）	話合い活動では意見を積極的に発言できるが、長い文章を書くことは好きではない。センテンス・カードを使うことで、書くことへの抵抗感を減らし、相手や目的を意識して書けるようにしたい。
単　元	発掘！　説得力のある文章表現				

(2)　検証場所と方法の見通し

	検証場所	検証の観点	検　証　方　法
見通し１	**つかむ場** センテンス・カードを使って文章を作る活動	相手や目的の設定と接続詞の使用や文の長さの制限を行って、センテンス・カードによる文のつなぎ方を考えることは、相手の立場や気持ちを考えて、受け入れやすい表現にすることできるようになり、説得力のある文章が書けることに有効であったか。	○文と文をつなぐとき、表現をどう工夫したかについて直す前のセンテンス・カードと比較し、説得力の増した表現となっているかについて分析する。 ・抽出児について、表現の変更や文の順序の変更など表現の工夫を行っている様子を観察する。 ・学習前に書いた文章と比較し、表現の工夫の変容について全体の傾向を分析する。
見通し２	**まとめる場** 作った文章から目当てを作る活動	センテンス・カードを使って作った文章について、表現方法の工夫点や改善点を振り返って目当てを作ることは、相手や目的を意識した表現力の高め方が具体的に分かるようになり、説得力のある文章を書く場合の視点をもつことに有効であったか。	○前時の学習の様子や自己評価の内容と表現の工夫について各自が作った目当てとを比較することで、表現の工夫に対する理解度の変化を調べる。 ・抽出児が自分の表現の工夫を見付け、目当てを作っている様子を観察して、その関連を分析する。 ・直した文章と作った目当てから、各自がもつ表現上の課題としての妥当性を分析する。

Ⅴ　研究の展開

1　本題材を通じて育てたい言語能力

相手に納得してもらえるように、相手や目的に応じた表現の工夫をして、説得力のある文章として書き表せる能力

2　題材名

「発掘！　説得力のある文章表現　　－自分の中に眠っている力を引き出そう－」

3　題材の考察

本題材は、自分の考えや意見が相手にとって妥当なこととして納得してもらえるように説得力のある文章が書ける力を養うことをねらいとした学習である。

子供たちは１学年の時、事実と主張とを分けて書く学習を行った。説明的文章において、筆者の考えと事実とを区別できるように文末表現や段落分けなどの工夫がしてあることを学び、自分が調べたことについて、その工夫をいかして文章にした。この学習を通して、自分の考えや意見を納得してもらうために根拠のはっきりとした文章を書く力を身に付けていった。

ただし、相手に納得してもらえるような文章を書くためには、相手や目的に応じて更に表現を変える必要がある。子供たちの言語生活を見ると、身近な友人など特定の相手を読み手とした文章を書くことがほとんどであり、相手を意識した文章を書く経験は少ない。そこで、相手や目的などを限定し表現の仕方を工夫する学習を行うことによって、相手に納得してもらえるような文章を書く力が身に付けられると考え、本題材を設定した。

4　目標及び評価規準

目標	相手や目的を意識し、相手に納得してもらえるように工夫して、説得力のある文章が書ける力を身に付ける。		
	国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
評価規準	相手に納得してもらうための表現方法を理解し、相手や状況によって表現を変えることを意識しながら文章を書こうとしている。	相手や目的に応じた表現の工夫をして、説得力のある文章として書き表せる力を身に付けている。	相手や目的に応じて言葉遣いなどの表現や主張と根拠の文の順序などの文章の展開を考えて書いている。

5　指導と評価の計画（全4時間　第1時省略　詳細は資料編参照）

過程	□ねらい ○主な学習活動	時間	学習への支援	評価規準 国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
見通し1	□条件を設定することによって、相手や目的を意識したセンテンス・カードを作ることができるようにする。 ○課題を読み、構想メモをヒントにセンテンス・カードを作る。	1	○自分の力に合わせて取り組めるように、ヒントとなる構想メモのプリントを複数用意する。 ○それぞれの文が段落の中でどのような役割なのかが分かりやすいように、二色の付箋を配布しておく。	◇センテンス・カードに課題に合った文を書こうとしている。（観察、自己評価カードの分析） **（十分満足とする状況・態度）** ○課題に挙げられた条件以外についても、根拠となる事柄はないかを考えている。	◇相手や目的を意識してセンテンス・カードを書いている。（センテンス・カードの分析） **（十分満足とする状況）** ○相手や目的に応じて表現を考えたセンテンス・カードを書いている。	◇設定した課題の相手や目的に応じて文末表現や文の成分の照応を考えた文を作っている。（センテンス・カードの分析） **（十分満足とする状況）** ○相手や目的に応じた文末表現や言葉の係り受けができた文を作っている。
見通し1	□限定した文のつなげ方を考えることで、表現を工夫して文をつなげられるようになり、相手や目的に応じた説得力のある文章が書けるようにする。 ○センテンス・カードに書いた文と文をつなげて文章にする。	1	○文同士の並べ換えやつなげ方が分かりやすいように黒板で実演してみせる。 ○必要な場合には、文のつなげ方の例を示した資料を活用できるように用意しておく。	◇相手や目的によって表現を変える必要があることを意識して、文と文をつなげていこうとしている。（観察、自己評価カードの分析） **（十分満足とする状況・態度）** ○相手の気持ちや考えを推測して、表現を工夫していこうとしている。	◇相手や目的に応じた表現の工夫を行って、文をつなげて文章にしている。（観察、ワークシートの分析） **（十分満足とする状況）** ○工夫する表現について、その効果を考えて選びながら文章にしている。	◇相手や目的を意識しながら文と文の関係を考えて、文をつなげている。（観察、ワークシートの分析） **（十分満足とする状況）** ○相手や目的に応じて、表現や文脈上の展開の仕方に違いがあることを意識しながら、文と文の関係を考えて文をつなげている。
見通し2	□作った文章を振り返って目当てを作ることによって、表現力を高める工夫が分かるようになり、自分にとって説得力のある表現ができる力を身に付けられるようにする。 ○説得力のある文章を書くための目当てを作る。	1	○工夫した点が見付けやすくなるようにセンテンス・カードを作ったときのワークシートをコピーしておき、表現を直した後のものと比較できるようにする。 ○工夫した表現について話合いがしやすいように、整理する観点をあらかじめ示しておく。	◇説得力のある文章にするためには、どんなことに注意すればよいのか、代表者の文章で自分が工夫した点から考えて目当てを作ろうとしている。（話合いの観察、自己評価カードの分析） **（十分満足とする状況・態度）** ○表現上の注意点と相手や目的を意識して工夫した点から、目当てを作ろうとしている。	◇説得力のある文章にするための表現の工夫を整理し、自己の表現力を高める目当てを作っている。（観察、目当て、ワークシートの分析） **（十分満足とする状況）** ○自分の表現の工夫点や課題を的確にとらえて、目当てを自分で考え、作り出している。	◇相手や目的に応じて表現や文章の展開に違いがあることを意識して、自分の目当てを作っている。（観察、目当て、ワークシートの分析） **（十分満足とする状況）** ○相手や目的に応じて表現や文章の展開にどんな違いがあるか理解し、それを自分の目当てにいかしている。

◇ は、おおむね満足する状況・態度

Ⅵ　研究の結果と考察

1　相手や目的を明確に設定し、センテンス・カードを使って文のつなぎ方を考えることは、相手の立場になってその気持ちを推測しながら、自分の主張を一層受け入れられやすくする表現の工夫ができるようになり、説得力のある文章が書けることに有効であったか

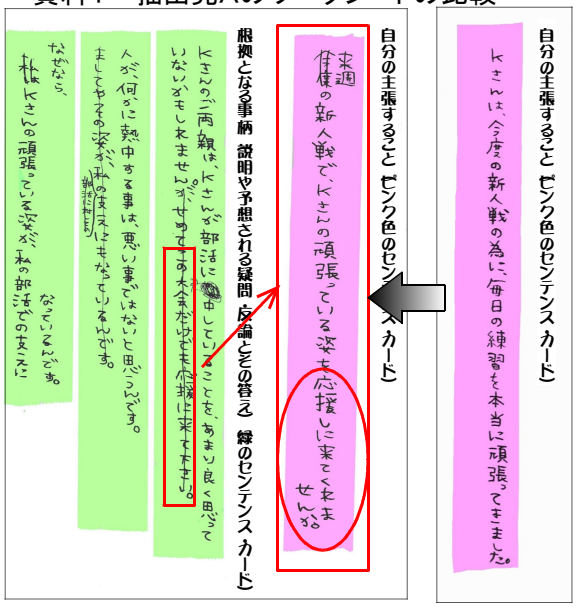
子供たちは右の課題を読んで、センテンス・カードを作り、説得力のある文章になるように文をつなげていった。提示した課題では、相手をふだん接することの少ない友達の親とし、目的を友達が出場する部活動の大会の応援に来てくれるように説得するという設定にした。文章を書く相手と目的を明確に設定することで、子供たちはそれらを一層意識して、相手を説得できるように表現を工夫していきやすくなると考えた。

＜課題＞
あなたは、同じ部活動のＫ君とは大の仲良しです。来週の日曜日に□□で新人戦が行われます。残念ながらあなたはケガをして出られません。しかし彼は、出場します。彼は、朝練を一度も休まず、厳しいトレーニングもさぼらずに取り組むなど、日ごろから頑張ってきました。彼自身もこの大会にかけています。また、あなたが部活をやめようか悩んだときも励ましてくれ、今も続けることができたのも彼のおかげです。そんな彼をあなたは応援したいと思っています。
しかし、彼がもらした言葉から推測すると、彼の家の人は、部活に熱が入りすぎていることをあまりよく思っていないようです。そこで、あなたは、彼の親に、今度の新人戦に彼の応援に来て、その頑張っている姿を見てほしいと考えました。そのために、彼の親に手紙を書いて説得することにしました。

(1)　抽出児の取組について

抽出児Ａは、センテンス・カードとして主張となる文を一つ、その根拠となる文を六つ作った。次に、幾つかの文に言葉を補ったり、文の順序を入れ換えたりした。Ａが書いたセンテンス・カードを見ると、主張を表すカードに根拠となる内容が書かれていた（資料１の右側）。そのことを指摘すると、Ａも間違いに気付いた。Ａは根拠を表すカードの中に主張の内容が書いてあることを見付け、それを主張の文として新しくセンテンス・カードを作り、間違えたカードと交換した（資料１の□）。このとき、「この大会だけでも応援に来て下さい」と書いてあったものを「来てくれませんか」いう表現に書き直した（資料１の□と○）。なぜこうした表現を用いたのか尋ねると、「Ｋさんの親は、部活動に熱中しているＫさんのことをあまりよく思っていないので、ただ『来て下さい』と書くよりもこうした言い方のほうがお願いを聞いてもらえそうな気がしたから」と答えた。Ａは相手が友達の親であり、自分の依頼が受け入れてもらえない可能性もあることを考えて、表現を変えたのである。これは、相手の立場を考え、読んだときの気持ちをある程度想定して、効果的な言葉にするという表現の工夫を行ったと言える。この表現の工夫によって、読み手にとって書き手の主張を更に受け入れやすくなり、Ａは一層説得力のある文章に変えることができたと考えられる。

資料１　抽出児Ａのワークシートの比較



抽出児Ｂは、説得力のある文章になるように、主張の文と根拠となる事実の文とを置き換えたり、新たな文を加えたりすることができた。文の順序についてまず考えてみるようＢに話すと、「友人のＫ君は毎日部活動を頑張っているのでぜひ新人戦を見に来てください。」という主張の文の前に、Ｋ君が頑張っている具体的な内容（「朝練を一度も休まず来ている」「厳しいトレーニングもさぼらず取り組んでいる」）が書かれた二つの文を置き直した。その理由をＢに尋ねると、「Ｋ君の親でも納得できることを先に言ったほうが分かってもらえると思ったから」と答えた。Ｂは、自分の意見を述べる前に相手に納得してもらえるだけの根拠となる事実を挙げたほうが説得できると考えて、文の順序を変えたのである。次に、文章の後半に「せめて９月６日の大会だけは見に来てください。」という文を新たに付け加えた。これはＢが、Ｋ君の親の気持ちを意識して、相手に譲歩した条件を自分で考えて付け加えたものと言える。このように、Ｂは相手の立場や意識を考えて、文の順序を変えたり、自分が必要だと感じた文を新たに付け加えたりすることによって、自分の主張が伝わりやすくなり、説得力のある文章にすることができたと言える。

(2)　学級全体の取組について

センテンス・カードをつなげて文章にしたときの表現の工夫について、まとめの場で表現の工夫を整理するときに使う観点から調べた。相手や目的を意識した表現の工夫については、学級の子供全員ができていた。特に全体の87パーセントの者が二つ以上の工夫ができていた（図１）。このことから、子供

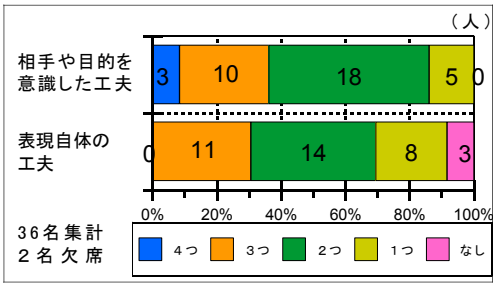


図１　表現の工夫点について

たちは限定された条件を設定することによって、言葉遣いなどの表現に関することだけでなく、説得力のある文章になるよう順序や表現を変えるなど、相手や目的を意識した工夫ができたと言える。また、子供たちの自己評価からも、相手や目的を意識して表現の工夫を行ったことがうかがえる。「説得力のある文章にするために、相手や目的によって表現を変える必要があると思うようになったか」という問いに対して、「とても思う」と答えた者が36人中29人であった。前時に「相手や目的を考えながら、センテンス・カードを書こうと思って取り組めたか」という問いでは、「よくできた」と答えた者が19人であったことから、相手や目的を意識して表現の工夫を行う必要性を強く感じた者が約50パーセントから80パーセントに増加した。これは、ほとんどの子供たちがセンテンス・カードを使って文のつながりを考えながら文章にしていったとき、それまで以上に相手や目的を意識して表現の工夫を行うことができたことを示している。

以上のことから、幾つかの条件を設定し、センテンス・カードを使って文をつなげることを考えることによって、子供たちは言葉遣いだけではなく相手や目的を意識して表現を変えたり説明や主張を補ったりするなどの工夫をして文をつなげられるようになり、相手や目的を意識した説得力のある文章を書くことができたと考えられる。

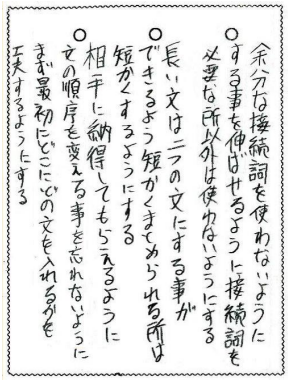
2　センテンス・カードを使って作った文章の表現の工夫について、観点を基に振り返って目当てを作ることは、自己の表現力を知り、相手や目的に応じた表現の工夫の中から自分にとっての方法が具体的に分かるようになり、説得力のある文章を書く場合の視点をもつことに有効であったか

(1)　抽出児の取組について

抽出児Ａの文章を、あらかじめ表現に関する項目と相手や目的を意識して工夫した項目とに分けて示した観点に基づいて班の中で検討し、それぞれの項目から三つずつ選んだ。その後、Ａ自身もそれぞれの項目についてもう一度確認し、自分の文章を見ながら、「さらに説得力を伸ばせるように、表現の工夫や順序を変えられるようにする」「余分な接続詞を使わない文が作れるように、つなげ方が工夫できるようにする」「相手の立場を忘れないようにして、表現を変えるようにする」という三つの目当てを作った。特に、「相手の立場を忘れないようにして、表現を変える」ことを挙げたのは、文をつなげて文章にしたとき、友達の親という相手の立場に立って「来てくれませんか」と表現を変えたことが、相手を説得するうえで効果的であったとＡ自身が感じたためと思われる。学習後の自己評価においても、「必ず相手の立場を考えること」を「これから文章を書くときにいかしていきたい」と書いており、自分が工夫した点を意識して目当てを作ったことが分かる。すなわち、Ａは目当てを作ることによって、説得力のある文章にするためには相手の立場を考えて表現を変えていけばよいのだと表現力の高め方が具体的に分かるようになり、文章を書くときの視点をもつことができたと言える。

抽出児Ｂは、班で使った観点の資料を基に自分が工夫した点を確かめ、「相手や目的を考えた言葉遣いにしている」「余分な接続詞を使わないようにしている」「主張の文を置く位置や数を工夫している」「相手の考えや気持ちを意識して表現を変えている」の四つの項目が当てはまるとした。それを基に、三つの目当てを作った（資料２）。「余分な接続詞を使わない」ことを目当てにしたのは、自分で意識しながら文章にしていけたことを改めて自覚したためであろう。それは、Ｂが自分の工夫した点として「余分な接続詞を入れていないところだ」と自己評価していることからも分かる。また、「相手に納得してもらえるように文の順序を変えることを忘れない」としたのは、文をつなげたときに主張の文の前に二つの説

資料2　抽出児Bの目当て



明の文を置き換えたことを改めて思い出したからであろう。さらに、「まず最初にどこにどの文を入れるかを工夫するようにする」と、文の順序についてどのように注意すればいいかという具体的な方法を挙げている。Ｂは、説得力のある文章を書く場合に気を付ける点とそのための対応方法を自分なりに見付け、表現力の高め方が具体的に分かるようになったものと考えられる。

このようにＡとＢは、目当てを作ることによって相手や目的を意識した表現力の高め方が具体的に分かるようになり、説得力のある文章を書くときの視点を自分自身で見付けることができたと言える。

(2)　学級全体の取組について

各自が作った目当ての中で相手や目的を意識した工夫について見ると、全体の約90パーセントの者が、整理する観点として使った四つの項目のうち、最低一つは目当てとして挙げている。また図２のように、これらの項目の中で、課題にないことも書き加えることを目当てとした者が最も多かった。しかも全員が、自分の直した文章の中で実際に工夫できていた。学習前のアンケートにおいて、説得力のある文章にするためにはどの力を最も伸ばしたいかという質問に対して、相手や目的に応じた文章を書く力を選んだ者は36人中８人だけで、残りの28人は文章の組立て方など構成の工夫に関する力について選んだ。目当てを作ることによって、ただ構成を工夫すれば説得力のある文章になるという考えから、相手に納得してもらえるようにするためには相手や目的に応じて言葉や文を自分で考えて書き加えることが重要であると、子供たちは改めて振り返ることができたと言える。

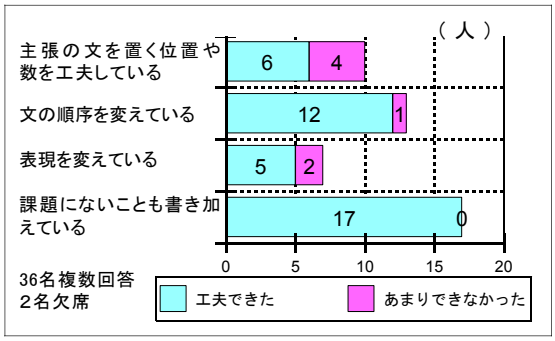


図2　目当てと実際に工夫した状況

以上のように、子供たちは目当てを作り、表現の工夫点や改善点について振り返ることによって、表現力の高め方が具体的に分かるようになり、文章を書く場合の視点をもつことができた。これによって、文章を書く場合に常にそのことを意識しながら書くことになるため、子供たちは説得力のある文章を書く力を身に付けることができたと考えられる。

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

○　子供たちがふだん書かないような相手やはっきりとした目的を設定することによって、相手意識や目的意識を明確にもって説得力のある文章を書くことができた。また、それまで説得力のある文章にすることを難しいと思っていた子供が、相手の立場で考え、目的に応じて言葉遣いや表現を工夫すればいいことに気付き、文章を書くことへの意欲にもつながった。

○　作った目当てが、言葉遣いなどの表現に関するものに偏っていた子供も何人か見られた。班での話合いにおいて、工夫点を確認するだけでなくそれぞれの工夫によってどのような効果があるのかについても意見を出し合えるように授業展開について考え直す必要がある。

○　本単元を行う場合、子供たちの個人差が大きく、ＴＴによる個別指導でも対応しきれない部分が多かった。簡潔で分かりやすい一文の作り方や構成の仕方などの学習について、ねらいを明確にして段階的な指導を行っていく必要があると考える。

＜主な参考文献＞

・藤原　宏　長谷川孝士　八田　洋　編著　『小学校　作文指導実践辞典』教育出版（1982）
・猪狩　章　著　『心に届く文章づくり』　岩波ジュニア新書（1995）